



鶏けいめい鳴

〒221-0864

横浜市神奈川区菅田町2851

(電話 045-473-7191)

パウロの言葉

「だれが、キリストの愛からわたしたちを
引き離すことができましょう。艱難か。
苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危
険か。剣か。」

聖書(ローマ書8章35節)

牧師 河合裕志

誠に力強い言葉。よくここまで言い切れるもの。私達だったらどうだろう。こんなにうまく行くものか。ここにあげられている七つのうち、どの一つが迫って来ててもすぐに手を上げてしまうのではないか。

その先頭にはペトロが立っている。彼はイエスの一番弟子として最も強くイエスの愛を感じていた筈。ところがイエスの裁きの庭で側にいた女から、あなたもイエスと一緒にだった、と言われあわててそれを打ち消した。彼は痛い目にあいたくなかった。更に剣を、死を直感した。

以降沢山の人々がキリストの愛から離れて行った。彼の弟子ということで不利益はこうむりたくなかったから。迫害されることは耐え難いことだったから。それを他の者が弱虫だといって非難することは出来ないのでは？自分もその場に立つことになったら何をしでかすかわからない。

しかしこの点パウロは違っていた。彼はこの七つを全部クリアした。このあたりのことは第2コリント書11章等に詳しい。そこから一つだけ上げれば「ユダヤ人から40に一つ足りない鞭を受けたことが五

度」と述べている。それでもくたばらなかつた。イエスなんか知らない、とは言わなかつた。

とにかくパウロには何をもって来ても無駄だった。それ程までにキリストの愛は強力だった。これはパウロの特異の体験に基づくことが大きかったのでは？彼は元々はアンチ・キリストの急先鋒。羊のように優しいクリスチャン達には大変に恐れられた。彼につかまって牢に入れられないように逃げ回っていた。

そんなパウロが復活したイエスから直々に声をかけられ180度の転回。今度は熱烈なキリストを伝える者になる。こんな内的変化が起ったのだろう。①イエスが復活したというのはデマでなく本当だった。こうして私に現に語りかけてきた。②イエスは私を呪い殺さず、罪を赦してイエスの使徒として立ててくれた。③イエスの十字架は犯罪人の死ではなく罪人の頭である私と全人類のための犠牲の死だったんだ。

こうしたことでパウロはキリストの愛を身に染みて感じそれから離れることは出来なくなっていた。私達も深くキリストの愛を覚えることが出来れば幸い。私の罪を自覚する程にキリストの十字架の愛は迫ってくるのでは。

集会案内

日曜礼拝：午前10時15分、日曜夕拝：午後6時

子どもの教会：日曜日午前9時

求道者会：日曜日午前9時40分

中高青年会：日曜日礼拝後

お話し会、卓球：水曜日午後1時～7時

お祈り会：水曜日午前6時、午前10時、午後7時